

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：14403

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13244

研究課題名（和文）第二言語学習に伴う学習者の認識の変容に関する研究

研究課題名（英文）Research on second language learning and learners' perception of self, others, and the world

研究代表者

李 址遠（Lee, Jiwon）

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：30802128

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本語学習者の語りを縦断的に分析することにより、第二言語の使用を通じた自己・他者・世界の構築という問題に取り組むための理論的・方法的基盤を提示することを目指した。

本研究の成果は次の2点である。

- (1) 「クロノトポス」の概念を用いた談話分析により、相互行為的な語りの実践を通して語り手のアイデンティティが呈示・構築される過程を明らかにした。
- (2) 同一の経験を題材にした母語と第二言語による語りを比較・分析することにより、語りにおける経験の表象が、語りとそのコンテクストとの指標的關係において組織化される過程の中で、いわば偶発的に生み出されるものであることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、語りの内容分析に偏重してきた従来の日本語教育の質的研究に対して、それが有する認識論的・方法的限界を指摘し、人々の語りを、語り手と聞き手の間で行われる相互行為として、語り手が自己とアイデンティティを呈示・構築し、世界を意味づける実践的行為として理解する視点を提示した点で学術的意義を有する。また、クロノトポスの概念を用いた場所と移動の語りと語り手のアイデンティティに関する分析は、移動が常態化しつつある現代社会を生きる人々の生をより深く理解するための視点を示した点で社会的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：By longitudinally analyzing the narratives of learners of Japanese, this research provides a theoretical and methodological framework for addressing the problem of second language learning and learners' perception of self, others, and the world. The research findings can be summarized in the following two points:

- (1) By utilizing the concept of "chronotope," the research clarifies the process through which the narrator's identity is presented and constructed within interactive narrative practices.
- (2) By comparing narratives in both the learners' first language (L1) and second language (L2) concerning the same experience, the research demonstrates that the representations of experience in narratives are contingently organized in an indexical relationship with the context of narration, rather than directly reflecting objective reality.

研究分野：日本語教育

キーワード：ナラティブ アイデンティティ コンテクスト クロノトポス 移動 表象 フレーム 一貫性

1. 研究開始当初の背景

日本語教育研究を含む第二言語教育研究では、言語の教育と学習を社会的な実践として理解し、それを学習者の自己の形成やアイデンティティの構築、共同体の創造といった問題に関連づけて論じる研究が増えてきている。そこでは「新たな言語を獲得することは新たな自己と世界を獲得することである」というテーゼが共有されているが、このテーゼを検証を要する課題として位置づけ、正面からその解明に取り組むという試みはこれまでに行われていない。特に近年の日本語教育の質的研究では、語りの内容を分析することによって語り手の現実を捉えることを目指す「内容分析」への強い偏重が見られ、言語使用を通じた自己の形成とアイデンティティの構築という本質的に社会言語学的な課題に取り組むための認識論的・方法論的土壌が十分に形成されていないのが現状である。

2. 研究の目的

本研究では、日本語の学習途上にある人々の語りを縦断的に分析することにより、第二言語の使用を通じた自己・他者・世界の構築という問題に取り組むための理論的・方法論的基盤を提示することを目指した。本研究で取り組んだ研究課題は次の2点である。

(1) 語りの実践を通じた自己アイデンティティの呈示・構築の過程の解明

第二言語話者が自身の経験を語る中で自己・他者・世界を表象する仕方と、それを通して自らのアイデンティティを形成・構築する仕方を明らかにすること。また、言語使用とアイデンティティという本来的に社会言語学的な問題を適切に分析するための研究の視点を提示すること。

(2) 語りにおける経験の表象の生成過程の解明

語りの中で語り手の経験に関する表象がいかにより作られられていくかを、語りを生成する「今・ここ」の実践という視点から明らかにすること。特に、語りの言語(L1, L2)が表象の生成に及ぼす影響を明らかにし、第二言語話者の語りを適切に分析するための視点を提示すること。

3. 研究の方法

(1) 調査概要

2020年1月から2021年10月までの間、4名の日本語学習者に対して計52回の縦断的インタビュー調査をZoomで行った。インタビューの大半は自由会話の形式をとっており、過去の経験、現在の状況、将来の目標など、調査協力者の自己、他者、世界に対する認識のあり方を窺える様々な話題が含まれていた。インタビューは全て録音・録画しており、3名(インターネットの接続状態の不安定さが目立った1名を除く)のインタビューデータを文字化している。

(2) 分析方法

文字化データを主な対象とし、録音・録画データを参照しながら談話分析を行った。分析では、社会記号論系言語人類学のコミュニケーション論(小山, 2009など)を基盤とし、言語人類学や社会言語学におけるナラティブ研究、文学批評、言語相対性をめぐる議論、バイリンガリズムとその認知的効果に関するSLA研究などを広く参照しながらデータを検討した。

4. 研究成果

(1) 語りの実践を通じた自己アイデンティティの呈示・構築の過程の解明

李(印刷中)では、オーストラリア人男性の語りを取り上げ、場所と移動に関する語りに注目して語り手のアイデンティティが「今・ここ」の語りの実践を通して呈示・構築されていく様子を明らかにした。男性は南ヨーロッパ出身の父と東南アジア出身の母を持つオーストラリア生まれの移民二世であり、彼の語りには、生まれ育った故郷であるローベン(仮名)という田舎と、彼が現在生活しているメルボルン、そして、その他のオーストラリア国内の様々な場所に関する語りが繰り返し現れていた。

分析では、Bakhtinが提示した「クロノトポス」(chronotope)の概念を用いた。クロノトポスは字義的に「時空間」を意味するもので、語りにおける空間、時間、人を切り離さずに理解することを可能にする概念として、近年言語人類学の談話研究に積極的に導入されているが、日本の研究ではその可能性が十分に示されていない。本研究では、男性の語りを組織化するクロノトポスを特定した上で、「今・ここ」の語りの実践における聞き手との相互行為によって指標されるクロノトポスが、語り手のアイデンティティを規定し創出させる過程を検討した。

男性の語りに繰り返し現れたのは、田舎と都会を中心とした様々な場所の間の二項対立的な構図であった。例えば、彼の語りにおける場所は、単一文化性と多文化性を両極とする軸の上に位置するものとして表象され、二項対立的な対比を通して意味づけられていた。ただし、そのような場所の表象は、同時に、過去(の記憶)と今、前近代的単一文化主義と現代的な多文化主義という時間的対比を内包するものであった。そして、そのようにして表象された時空間はさらに、

文化的多様性を擁護する現代的な都会の住民、未だに人種差別を行う前近代的な田舎の住民といった具合に、その中に住まう人々の性格を規定するものとなっていた。本研究では、男性の語りが繰り返し依拠するこのクロノトポスのことを「多文化主義のクロノトポス」(図1)と称し、そのクロノトポスへの指標を通して語り手の自己アイデンティティが呈示・構築される過程を検討した。

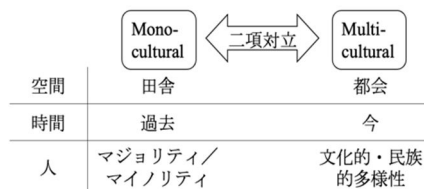


図1 多文化主義のクロノトポスの構成

分析では、「今・ここ」での聞き手との相互行為的交渉を通して指標されるクロノトポスの流動性を示すと共に、単一文化主義を非難し多文化主義を擁護する語り手のアイデンティティが、「多文化主義のクロノトポス」に媒介された形で指標されることを明らかにした。また、そのクロノトポスが、語り手が経験した人種差別の記憶に根ざして形成されたものであることを示した。このように、本研究では、クロノトポスという概念を援用することにより、「今・ここ」での語りの実践を通して過去の経験が意味づけられ、語り手のアイデンティティが呈示・構築される過程を肌理細かく記述することができたと言える。

(2) 語りにおける経験の表象の生成過程の解明

李(2023a, 2023b)では、一人の語り手が同一の経験について語った日本語(L2)と英語(L1)のナラティブを取り上げ、経験の表象が「今・ここ」での語りの実践を通して偶発的に生成されていく過程を明らかにするとともに、両者の相違をもたらす要因について考察した。

分析では、「火災」と「誕生日」という二つの出来事に関するL1とL2での語りを取り上げた。それらの出来事はいずれも語り手の記憶に鮮明に刻まれたものであり、記憶の曖昧さによる内容の齟齬や矛盾が生じる可能性は低いと予想されたが、L1とL2では内容上の相違が見られた。本研究では、語り生成され組織化される「今・ここ」とそのコンテクストに焦点を当てた談話分析により、相違をもたらす要因として次の3点を指摘した。

語りを組織化するフレームの違い

「火災」のエピソードに関して、L2の語りでは、「社長」の催促が原因で火災が発生したことが述べられていたが、L1ではそもそも社長が語りに登場せず、火災当時の状況の描写に重点が置かれていた。この違いは、二つの語りそれぞれ異なるフレームによって枠づけられたことに起因するものであった。L2の語り「なぜ仕事を辞めたか」という質問に対する答えとして枠づけられ、社長を火災の原因として提示することに主眼が置かれていたのに対して、L1の語りは“I'll tell you a scary story”という切り出しによって枠づけられており、そこでは、火災という出来事の報告価値の伝達に重点が置かれていたのである。

一貫性の生成と維持

「誕生日」のエピソードに関しては、語り手がパン屋で偶然出会い会話をした高齢の女性の表象に関する違いが見られた。L2の語りでは女性は丁寧で控えめな人物として描写されていたが、L1の語りにおける女性は積極的で陽気であった。分析の結果、L1の語りでは、女性の表象が、会話の状況の滑稽さの伝達という語り手の関心の下、語りの一貫性を維持・構築させる過程の中で偶発的に作り上げられたものであることが明らかになった。

語りの言語による影響

一方、L2の語りにおける女性の表象には、語り学習途上にある日本語で語られているという事実が影響している可能性が窺えた。すなわち、丁寧で控えめな女性の姿は、語り手が、実際には英語で話していた女性を、直接引用という語り的手法を通して日本語で話させることによって、語り手の話す日本語の特徴を色濃く反映する形で作り上げられたものであるという可能性が示されたのである。

このように、本研究では、語りにおける経験の表象が、語りコンテクスト(語りの言語を一側面として含むコンテクスト)を指標しながら組織化される過程の中で、いわば偶発的に生み出されるものであることを明らかにした。これにより、内容分析に偏重してきた従来の日本語教育の質的研究の限界を指摘するとともに、語り生成される「今・ここ」に注目した分析の重要性とその具体的あり方を提示できたと言える。

<引用文献>

- 李址遠(2023a)「第二言語話者の語りをいかに分析するか 母語での語りとの比較を通して」『社会言語科学会第47回大会発表論文集』143-146.
- 李址遠(2023b)「どの言語で経験を語るか 母語と第二言語による語りにおける表象の違いに注目して」『2023年度日本語教育学会春季大会予稿集』173-178.
- 李址遠(印刷中)「移動の語りと自己アイデンティティ 空間・時間・人間像のクロノトポスの表象に注目して」『社会言語科学』26(1)
- 小山亘(2009)「シルヴァスティンの思想 社会と記号」小山亘(編)『記号と思想 現代言語人類学の一軌跡:シルヴァスティン論文集』三元社 pp.11-203.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 李址遠	4. 巻 26
2. 論文標題 移動の語りと自己アイデンティティ 空間・時間・人間像のクロノトポスの表象に注目して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 李址遠
2. 発表標題 第二言語話者の語りをいかに分析するか 母語での語りとの比較を通して
3. 学会等名 社会言語科学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 李址遠
2. 発表標題 どの言語で経験を語るか 母語と第二言語による語りにおける表象の違いに注目して
3. 学会等名 日本語教育学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------